谷田地域の茶もみ唄

有度山（日本平）北麓の谷田地域は、古くからの茶の産地である。
いまも県立大学周辺は茶畑が広がっているが、ここの茶は香と味ですぐれている。そして、明治の開国から、海外へも輸出されていった。絹と茶は明治期日本の主要輸出品だったのだが、そのことをいまに伝えているのが、『谷田地方の茶もみ唄』である。

〈貴重となった録音テープ〉
お茶市場がたつ静岡安西の『茶町』から、牛車や人力車に乗せられて清水港に運ばれたのだが、それが、この歌詞にでている。やがて『お茶運搬』のためにつくられた『軽便鉄道』が、現在の静鉄電車になっていった。
その茶を揉みながらうたわれていたのが、この唄で、類似のそれは県内各地にあったがいまは殆どうたわれていない。貴重な録音記録となっている。（なお希望者には、このテープ差し上げます）

（国際関係学部教授・高木桂蔵）

谷田風土記 77

茶もみ唄

はーお茶は始まる
　はーお茶摘みゃ来るナーエー
　　（エレソーダーソーダーヨー）
はー今年もな来たかよ
　　（ハーコリャコリャ）
　はー来たかよなえ　あの娘
　　（ハーモミコメ　モミコメ）
はーお茶の出どこは　はー安西茶街よ
はー牛になー　引かせてよ
　はー引かせてナーエー　清水まで

はー清水港から　はー蒸気に乗せてよー
　はー明日はなー出船のよー
はー出船のナーエー　かじまかせ

シンポジウム「静岡県のベンチャー企業とそれを支える社会基盤」開催

●日　時　３月15日（土）午後２時から午後6時
●場　所　静岡県立大学　小講堂
●内　容
挨　　拶：廣部雅昭（静岡県立大学長）、石川嘉延（静岡県知事）
基調講演：清成忠男（日本ベンチャー学会長、法政大学総長）「産業集積とベンチャー企業」
講　　演：和田英孝（ジーマ⑭　代表取締役）「なぜ静岡県で起業したのか」
パネルディスカッション　　テーマ：「静岡県における起業の現状と起業支援のあり方」
司　　会：吉川智教（イノベーション研究部会長　横浜市立大学教授）
パネリスト：菅沼正司（⑭キャンバス　代表取締役社長）、福地三則（⑭ＣＡＩメディア共同開発代表取締役社長）、田島豊久（ナルテック⑭　代表取締役）、小出宗昭（ＳＯＨＯ静岡　インキュベーションマネージャー）、谷和実（静岡県商工労働部長、吉川智教（横浜市立大学教授）
●参加料：無料（事前申し込みが必要）
●問い合せ・申し込み先：静岡県立大学事務局・学務スタッフ（054-264-5008）
●主　催：日本ベンチャー学会、同イノベーション研究部会　　●共催：静岡県立大学

学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル、その他寄稿を積極的にお寄せ下さい。大歓迎します。
事務局経営課・企画スタッフ（管理棟２階）法月あてにお願いします。
Ｅ－ｍａｉｌ：ｋｉｊｏ４@ｇｍ．ｕ－ｓｈｉｚｕｏｋａ－ｋｅｎ．ａｃ．ｊｐ

企画・編集　静岡県立大学広報委員会　ＴＥＬ　０５４－２６４－５１０３
静岡県立大学ホームページアドレス ： http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています

VOLUME 85
FEBRUARY 28 2003

HABATAKI
はばたき
UNIVERSITY OF SHIZUOKA
52-1 Yada,Shizuoka-shi shizuoka-ken 422-8526 Japan
inside NEWS

●CONTENTS●

21世紀COEプログラム研究課題決まる…… 1
2002USフォーラムを開催…… 2
学長選挙速報 …… 2
現代韓国朝鮮研究センターを設置…… 3
環境科学研究所の動き…… 4
看護学部の動き…… 5
文芸コンクール優秀賞…… 7
メディシナルケミストリーシンポジウム開催…… 13
健康をつくる食事のワンポイントアドバイス①…… 13
モスクワ国立国際関係大学教員・学生が来学…… 14
研究助成の採択…… 14
厚生労働省科研費採択状況…… 14
図書館だより…… 15
日本環境変異原学会賞受賞…… 16
全国学生俳句大会で入賞…… 16
本学教員からの著書寄贈…… 16
企業訪問にみる採用戦線は…… 17
新たな全学共通科目開講の目指すもの…… 18
研究室・ゼミ紹介…… 19
院生からのメッセージ …… 20
MGIMO留学体験記 …… 21
谷田風土記77 …… 23
シンポジウム「静岡県のベンチャー企業とそれを支える社会基盤」…… 23

21世紀COEプログラム「先導的健康長寿学術研究推進拠点」の研究課題決まる！

本拠点では、食品と医薬品の併用による複合効果の発現と機構解明およびそれらの知見に基づく副作用の予知および軽減、食品および医薬品、特にその併用時における安全性評価法の確立、また機能食品の有効成分をもとにより安全性の高い治療薬の創製などを目指して、生活健康科学研究科と薬学研究科が緊密に連携を保ちつつ拠点を形成することにより、疾病の予防から治療にいたるまで一貫性を持った新学問領域「健康長寿科学」を創成することを目的として研究･教育を推進します。本年度の拠点事業推進担当者および協力者の研究課題が決定しましたのでお知らせします。

拠点リーダー　木苗直秀

大学院生活健康科学研究科　（50音順）

	研究代表者名	研　究　課　題
拠点事業推進担当	伊勢村　護	茶成分による遺伝子発現調節とその評価系の構築
	大橋典男	プロテオーム解析による新興感染症「エーキリア症」病原体の病原性発現機構に関する研究と食薬融合研究における生活習慣病等の病態バイオマーカーの探索
	加治和彦	癌および痴呆予防の医薬品と食品の開発
	木苗直秀	がん予防を目的とした植物成分間及び植物・薬物成分間の複合効果と安全性評価
	熊谷裕通	生体防御能賦活栄養剤開発のための免疫栄養指標および抗酸化指標の検索
	合田敏尚	食品成分・医薬品送達調節系としての消化管機能の制御機構とその生活習慣病予防への臨床応用
	小林裕和	遺伝子操作を基盤にした薬食生産のための植物の活用
	寺尾良保	内分泌攪乱物質の検索とエストロジェンとの複合効果に関する研究
	中山　勉	質量分析法を利用した脂質過酸化物修飾タンパク質の解析
	横越英彦	食品成分の脳神経機能に及ぼす作用機序の解明と、その薬理学的研究
協力者	荒川泰昭	呼気中成分分析による病態解析ならびに安全性評価システムの開発
	池田雅彦	脳卒中の発症機構の解明と食品による予防効果に関する研究
	伊吹裕子	環境因子による細胞の不死化および不死化誘導分子の探索
	桑原厚和	食物繊維の２次機能（感覚機能）が大腸の生理機能に与える影響に関する基礎的研究
	鈴木裕一	胃と腸の粘膜感覚神経上に存在するVR1受容体活性化の消化管機能制御に果たす役割と、その生活習慣病予防への臨床応用のための基礎的研究
	竹石桂一	ビタミン誘導体による白血球分化誘導過程での増殖抑制の分子機構の解析
	丹羽康夫	葉緑体を利用した高機能食品および薬品生産のための分子生物学的基盤研究
	野沢龍嗣	魚肉ペプチド利用に関する遺伝子のクローニングとペプチドの精製
	橋本伸哉	化学物質による精子運動能への影響評価システムの開発
	堀江信之	DNA合成関連遺伝子の遺伝子多型に着目した予防栄養学のための基礎研究
	吉岡　寿	高速フローESR法を用いた茶カテキン類のラジカル消去反応の研究
	渡辺達夫	食品成分と辛味受容体（VR1）との分子的相互作用

大学院薬学研究科（50音順）

	研究代表者名	研　究　課　題
拠点事業推進担当	今井康之	高機能食品の開発をめざした粘膜免疫の研究
	奥　直人	高度QOLがん撲滅新戦略治療法の開発研究
	菅谷純子	薬物代謝酵素誘導に基づく生体順応性を引き起こす食品成分の探索と評価法の研究
	鈴木　隆	パラインフルエンザウイルス感染症の解明と化学療法剤の開発
	鈴木康夫	食用素材分子による感染症・がん・炎症の克服
	出川雅邦	高血圧とその効果的薬物治療に関する研究
	豊岡利正	生体機能性分子の迅速高感度評価システムの構築
	野口博司	薬用植物の遺伝子資源を活用した非天然型新規化合物の創製
	増澤俊幸	レプストピラポストゲノムにおける病原分子ヘモグロビンセンサ蛋白質の機能解析と新規経口ワクチン開発の基礎となる発現蛋白質のディファレンス解析
	山田静雄	メディカルハーブと医薬品の相互作用・併用効果の機構論的解析

	研究代表者名	研　究　課　題
協力者	阿部郁朗	コレステロール生合成阻害作用を指標とする食品由来創薬シーズの探索研究
	五十里彰	高食塩食のナトリウム依存性糖輸送体に及ぼす影響と高血圧発症との関連
	黄倉　崇	モルヒネの鎮痛作用増強を目指したグレープフルーツジュースの併用効果に関する研究
	佐塚泰之	緑茶成分Theanineによる抗腫瘍剤効果増強と副作用軽減に関する研究
	武田厚司	生体微量金属の作用に基づいた脳機能解析と脳疾患の予防
	田中　圭	EGCgの不斉全合成を基盤とするバイオプローブの開発研究
	中野眞汎	治療薬内服中の血中濃度に及ぼす銀杏葉エキスなどサプリメント摂取の影響
	中山貢一	循環系のメカノトランスダクションに対するバイオフラボノイドの作用

計画研究（人体評価系）

研究代表者名	研　究　課　題
合田敏尚（代表）	保健機能食品・医薬品の有効性・安全性評価システムの構築とその臨床応用

２００２ USフォーラム開催せまる！
（静岡県立大学学術フォーラムIII）

March.３．３(Mon)～３．５(Wed)

昨年、１５周年記念事業の一環として開催した学術フォーラムは、学内外から好評をいただき、本年度においては、後藤研究費及び学長特別推進費による研究成果の発表に加え、本学が２１世紀ＣＯＥプログラムに採択されたことから、その研究成果の発表を併せて行います。教員、学部生、大学院生の皆様には奮ってご参加ください。（詳細日程は掲示板等でお知らせします。）

日　時　　３月　３日（月）・４日（火）・５日（水）
場　所　　看護学部棟　１３４１１教室ほか
発表対象研究
　○平成１４年度後藤研究　（一般研究）　　１２研究課題
　○平成１４年度後藤研究　（茶先端生命科学研究）　３３研究課題
　○平成１４年度学長特別研究（特別推進研究）　２９研究課題
　○２１世紀COEプログラム研究　　４１研究課題

廣部現学長が再選　―学長選挙速報―

本学の廣部雅昭学長の任期満了に伴う学長選挙は、１月２０日（月）に第２次選挙が行われ、廣部雅昭現学長が再選された。任期は平成１５年４月１日から２年間。選挙は、学長適任者推薦委員会から推薦のあった学長適任者が、廣部雅昭（現学長）、青木保（政策研究大学院大学教授）及び須田立雄（埼玉医科大学ゲノム医学研究センター副所長）の３氏であったため、第１次選挙は実施されず、第２次選挙で有効投票総数の過半数を獲得した廣部現学長が当選した。

廣部学長は、東京大学薬学部長などを経て、平成１１年４月から本学の学長を務められている。

現代韓国朝鮮研究センターを設置

静岡県立大学は平成１５年１月１７日、大学院国際関係学研究科府園区研究施設として「現代韓国朝鮮研究センター」（所長：伊豆見元国際関係学部教授）を設置した。

現在、アジアは、政治、経済、社会・文化各方面で世界の注目を集めており、とりわけ、朝鮮半島問題の動向は世界中の大きな関心事であると言ってよい。本研究センターは、朝鮮半島問題について、政治、経済、社会・文化の３つの分野から集中的に研究するのみならず、世界各国の朝鮮問題研究機関、専門家との連繋を通じて、今後の「望まれるアジア情勢」の構築を視野に入れた国際的研究拠点となることを目指している。

具体的なテーマは以下の通りである。

（１）北朝鮮をめぐる国際関係

小泉総理の北朝鮮訪問を契機として、日朝関係が国内外の注目を集めていることはいまさら指摘するまでもないが、北朝鮮問題の動向は今後のアジア地域の趨勢を決定する大きな要因であり、そしてそれは単にアジア情勢のみならず世界情勢にも影響を及ぼす極めて大きな問題である。本研究センターでは、そうしたより広い視野に立って北朝鮮問題を扱い、東アジアの新たな安全保障環境構築過程に備える準備をする。

（２）東アジア経済圏構想

日本経済のさらなる発展のため、日本と他国、他地域との経済協力のあり方が模索されている。いわゆるFTA（自由貿易地帯）構想はその象徴と言ってよく、アジアにおいてはシンガポールに続き、現在、韓国とのFTAが徐々にではあるが実現の方向に向かいつつある。本研究センターでは、現在進行中の日韓FTA構想を軸に置いて、より広い東アジア経済圏構築に備える準備をする。

（３）日中韓社会・文化比較

上記、（１）（２）の構想を実現するために必要とされるのは、アジア諸国の理解と友好であるが、それぞれ悠久の歴史を有し、独自の文化を形成しているアジア諸国には、相互に誤解と齟齬が生じやすく、またそうした誤解と齟齬がアジアにおける諸問題の直接的要因となっている場合が多い。本研究センターでは、とりわけ、これまで日本との間に誤解、齟齬が多かった、韓国、中国と日本の社会・文化の歴史的個性と現代社会現象の相違点と共通点を比較検討し、アジア諸国の理解と友好を深めるための準備をする。

以上のように、政治、経済、社会・文化３つの領域から、朝鮮半島問題を軸として、アジアの諸問題を検討し、新たな東アジア環境に備えるための準備をすることが本研究センターの目指す研究方向である。

環境科学研究所の動き

環境科学研究所長　五島廉輔

平成１４年初頭に自己点検報告書を作成し、それに基づいて４名の外部審査員により外部評価を受けた結果を「自己点検・外部評価報告書」としてまとめました。多くのご指摘を真摯に受け止め、今後の環境科学研究所の発展のために、三つの委員会を発足させました。第一に「組織・形態検討委員会」です。この委員会では環境科学研究所が将来に向けてどのような組織形態にすることが望ましいかを検討します。私どもの現在の組織は、環境科学研究所を母体とした大学院環境物質科学専攻をもっていますが、やや変則的で学部は持っておりません。そこで本研究所が抱える様々な問題を克服するために、将来自前の学部をもつことなど、根本的な組織形態の変革を志向する将来構想を練っております。第二には「大型プロジェクト検討委員会」です。この研究所ではグローバルな視点で地域の環境問題に取り組むことを目指していますが、研究所が一丸となって取り組める大型プロジェクトを検討しています。第三には「資格試験検討委員会」です。現在は専門性を高めること、特に専門の資格を取得することは厳しい就職状況下では有利になる時代になっています。そこで環境関連の国家試験受験を支援するための講義を開設するなど具体的に検討しています。教員全員で分担してそれぞれの委員会に参加し真剣に協議を重ねています。

教員人事では、森田全前環境微生物学研究室教授の定年退官に伴い、後任として大橋典夫助教授が４月より着任されました。

環境科学研究所は平成９年に開設され、平成１４年度は創立５周年記念事業として、研究所一般公開や環境学習サポーター養成講座などを開催しました。研究所公開は「県民の日」として一般市民を対象に８月２５日（土）に行いました。小学生を含めて約２４０名の見学者が訪れました。アンケート結果で環境問題に深い関心を寄せており、地域における環境科学研究所の役割の重要性が再認識されました。これに先立ち６月２２日に大学院受験希望者を対象にした研究室公開を開催しました。各研究室の研究内容をわかりやすく展示し、活発な質疑応答と通して、環境物質科学専攻をアピールしました。約４０名の来所者があり、中には終了時間を過ぎても、自分の進路を真剣に探し求めている姿は印象的でした。

静岡県教育委員会主催の「県民カレッジ」の中に地域の環境サポーター養成を目的とした「環境学習サポーター養成講座」があります。今年度からは環境科学研究所主催として行うことになり、１０月から１２月まで毎週土曜日に８回行いました。４５名の参加者があり、「県民カレッジ」受講単位と出席率の高い方には「修了証書」が授与されました。また、小学校の教員に環境に関する実習を体験してもらい、教育に役立ててもらうことを目的として「環境体験実習」を８月に行いました。静岡県教育研究会の後援を得て、延べ２４名の教員の参加があり、熱心に実験等に取り組んでおられました。

環境科学研究所は創立５周年を向かえ、一層の教育・研究の成果を上げるともに、地域貢献にも積極的に関わっていきます。また平成１７年度から施行される独立法人化に向けての努力も必要となります。

看護学部の動き

看護学部長　佐藤登美

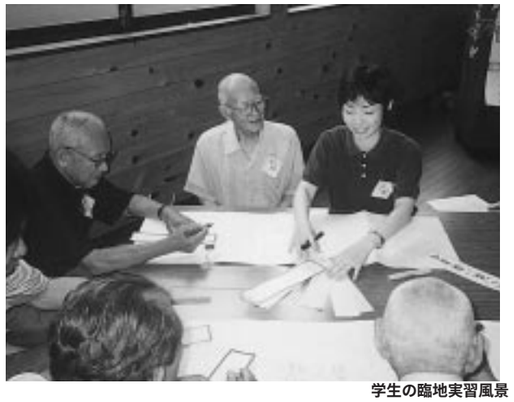
平成９年開設した本学部も今年は６年目となり、平成１３年開設した看護学研究科も２年目を迎えました。昨年度は、開設の９年～１２年度までの４年間の教育・研究活動などに対する自己点検・評価を全教員体制で行い、外部評価を受けましたが、今年度は、その結果を踏まえて課題別に２つの特別委員会を設置し検討を行っています。

１　学部概況

まず、 在籍学生数などの概況から申しますと、学部学生数　２５１名、研究科学生数２０名です。これまで２回の卒業生（１０９名）を送り出し、この３月には編入学生を含め３回目の卒業生を送り出す予定ですし、看護学研究科の第1回修了生が誕生します。また、社会人聴講生は、前・後期合わせて７名が在学中です。

教員の移動等では、奥原秀盛助教授（６月）、東川佐枝美講師（９月）、助手の小坂美智代先生、熊坂隆行先生、斎本美津子先生（それぞれ４月）が着任され、現在教授１２名、助教授２名、講師９名、助手１４名の３７名であり、このうち１７名が研究科を兼務しております。

卒業生の就職状況では、１３年度卒業生５３名は病院など看護師としての就職が９０％、県や市町村へ保健師としての就職が１０％で、就職率１００％です。進学では、１３年度は２名が本学の看護学研究科へ進学しました。また、開設以来高い志願率を維持している社会人および編入学選抜では、本年もそれぞれ１０.５倍、４.８６倍の高倍率となりました。この入学制度への臨床現場や社会的ニーズの高いことを考慮し、入学定数などの見直しを含め学則の一部改正の検討を行い、承認されました。受験生にとってこの制度はさらに活用しやすくなったといえます。　また、教育活動全般を見渡すと、６年目となった現在、講議・演習など学内での教科プログラムでは大方順調に経過していると思われますが、実習においては、受け入れ施設との連携体制が整った領域がある一方で、新たに受け入れ施設を開拓しなければならない領域もあり、これは今後の課題といえそうです。



学生の臨地実習風景

２　特別委員会の課題

昨年度の自己点検・評価の結果を重視し、早速４月から、「カリキュラム検討委員会」と「入試検討委員会」を設置し、現在それぞれの課題について検討を続けているところです。

委員会の課題は、次のようなものです。

・カリキュラム検討委員会：看護教育の大学化が進むなかで、本学部のコアとなる教育的課題を抽出し、教育方法について検討していく。

・入試検討委員会：いままでの入学試験のやり方・問題点を整理し、今後の入学試験の基本方針と改善策を明らかにする。

いずれの課題も、本学部にとって今後さらに発展していくために、また将来的な観点から重要な内容だと考えて取り組んでいます。

学生運動会

３　その他

昨年に続いて今年も、学生主体の災害時の救護のためのボランティア活動グループ「防ｚ」の活動や学生に人気のある「学生運動会」が行われ、先輩の意志は後輩との継承され、その意気や軒昂です。

本学部に関連するところでは、第４回日本看護医療学会学術集会が、学会長西垣克教授で、１０月５日本学キャンパスで盛大に行われました。また、県立総合病院（学会長：佐古伊康院長）が実行施設となって、第４１回全国自治体病院学会が１１月１４・１５日静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」で開催され、西垣克教授、佐藤登美学部長などがシンポジウムや基調講演を行い、学生も参加してる学会の雰囲気を経験しました。

最後になりましたが、それにこれはとても哀しいことですが、４年生に在学中であった長倉ゆきのさんが平成１５年１月１９日逝去しました。幼い頃から持病を抱えながも、人一倍明るく、誰からも愛され、看護が好きで本学に学び、念願の県立こども病院への就職も決まっていた矢先のことでした。お葬儀では、ゆきのさんに廣部学長から「はばたき賞」が贈られ、たくさんの級友が参列するなかで、木俣梓さんが「ゆきのさんの辛抱強く温かい心を、私たちの心として…」と弔辞を読みました。私ども教員もまた、本当にそのように心がけていきたいと思います。合掌。

地域防災訓練に参加して

防災ボランティア「防’Z」代表　看護学部2年　加藤翼

昨年１２月１日に実施された防災訓練は、地域の方々の防災に対する意識の高さを実感することが出来たものであった。昨年度の私達防災ボランティアは、主力であった３年生が実習のため忙しく少ない人数での活動でした。その為、メイン活動でもある１２月１日の防災訓練も１箇所で行う予定で、最初に依頼をいただいた清水市西久保を検討していました。しかし、活動当初からお世話になっている静岡市谷田、清水市谷田の代表の方から今年もお願いしますというお言葉をいただき、周りの協力も得て何とか３箇所で心配蘇生法などの訓練を実施することが出来ました。

訓練当日は残念ながら小雨が降っていましたが、それでも多くの方が参加してくれました。訓練の中では皆私たちの話を真剣に聞いてくださり、多くの質問や意見など頂戴しました。その中で三角巾での応急処置の訓練が終わった後、小学生の男の子が「明日学校でみんなに見せてやる。」と笑顔で言ってくれて大変嬉しく感じました

確かに防災訓練は厳しく行うほうが、今後のためになります。しかし私達はこの小学生のように楽しく訓練に参加し、防災に興味を持ってもらうことが大切なことであると思います。今年はそんな訓練を行えるように、私達自身が防災の知識を高めると共に、少しでも多くの地域の防災訓練に参加したいと思います。

第６回学生文芸コンクール　文芸の部優秀賞

「静岡県立大学はばたき寄金」主催第６回学生文芸コンクールの文芸部門において、国際関係学部２年の平岩愛さんの作品「彼岸花」が優秀賞を受賞し、昨年１１月２日（土）の剣祭において廣部雅昭学長から表彰を受けました。その作品をここに紹介します。

『彼岸花』

国際関係学部国際言語文化学科２年
平岩　愛

夏休みに入って数週間が経ち、明日から盆である。熊蝉が今を盛りとばかりに鳴いている。

周りはうっそうとした木々に覆われている。この道は、川に沿って山に入り込んでおり、やがて山の上にある寺へと続いている。最近ではもっと大きな舗装された道路ができ、山へ野良仕事に行く人以外、誰もこの道を通る人はいない。濃い緑色の葉陰のために陽射しはさえぎられ、川は暗く、さらさらと涼しげな音をたてて流れるほかは、何も聞こえない。

そんな寂しいところを私が歩いているのには、ちょっとした訳があった。私はちょうど夏休みに入る頃、捨て猫を見つけ、親や、他人には知られないように注意しながらほぼ毎日餌をあげていた。野良猫だけあって始めのうちは、警戒して私が置いていくものには手を出そうともしなかった。しかし、最近では、私が来る時間帯になると道端に座って待っている。また、自分で取って食べることもあるのか、魚や、鳥などの骨が落ちていることもあった。

私は夏休みが始まって以来、昼間はこの猫と過ごし、スケッチや読書をすることに決めていた。

いつも通り、道端で毛繕いをしている猫を見つけ、少し藪を入ったところにある椎の木の下に腰を下ろして、キャットフードと、牛乳をやる。猫は私の足に頭をこすりつけると、牛乳を舐め始めた。そこで周りを見回して、はじめて辺りの草が刈ってあることに気がついた。道端の草はそのまで、どうしてこの辺りの草だけ刈ってあるのか不思議に思ったが、誰かが野良仕事のついでにやったのかもしれないと思い、空腹を満たし、気持ち良さそうに昼寝をはじめた猫をスケッチし始めた。

スケッチの手を止めたとき、せっかく草が刈られて歩きやすくなったのだから、その辺を散歩してみようという気になった。早速立ち上がり、ふらふらと歩き始めた。

少し行くと開けたところに出た。刈られた草が日に当たり、干草のようなにおいがしていた。後を付いて来た猫が、急に右に向かって走り出した。そこには碑のようなものがあり、私は初めてその存在に気が付いた。今まで気付かなかったことに衝撃を受けながら、何の碑か興味が湧いた私は、その碑を隈なく調査した。誰かのお墓らしいと思い、何かいけないことをしたような気がして、手を合わせて墓の主に向かって謝ると、もと自分がいた場所に戻ろうと思い、後ろを振り向いた。そして、私はとても驚いた。

私の真後ろに、人が立っていたのである。

気が付かないはずはなかった。しかし、実際気が付かなかったのである。私はあまりの驚きのため、声が出せず、口をあんぐりと開けるだけで精一杯だった。

それは男の子で、私と同じくらいの年だと思ったが、背が高く、疲れたような顔をしており、私より大分年上にみえた。髪は短く刈ってあり、服装はTシャツにカーキパンツで、どこにでもいるような人に見えた。けれども、どうして人があまり来ないここにいるのだろうか。

私は一瞬で判断すると、とりあえず、少し彼から離れることにした。横に動きながら、私は口を開いた。

「あの、何か、用ですか？」

返事がない。彼の視線は私がもといた所をじっと見つめている。見つめているというよりも、焦点があっていない。もう一歩、後ずさりをして、もう一度声をかけた。本当は怖くて逃げたかったが、なぜかそうしないわけにはいかなかった。

「あの……？」

そこで、やっとその男の子は私のほうを向いた。

「ここで、何をしていたんだ？」

今度は、向こうから質問をしてきた。私が言ったことを聞いていたのか、腹立たしく思いながら、答えた。

「この石碑を見ていたんです。今まで気が付かなかったから。あなたの方こそ、何をしていたんですか。私、後ろに来たことに気が付きませんでした」

途中で、緊張していたため、声が裏返ってしまった。たぶん、顔も引きつっていただろう。すると、向こうは突然笑い出した。

「ははは、大丈夫だよ。君に何かしようとした訳じゃない。ただ、この石碑にいたずらをしたら困ると思って監視していたんだ。そうしたら、君、これに興味深げに見入っているだろう。最後には手まで合わせて。拍子抜けしちゃったよ」

彼はそう言うと、また快活そうに笑った。先程の疲れた表情がうそのようだ。

「私、そろそろ帰らなくちゃいけないから」

変な人と関わり合いたくなかったため、私は荷物が置いてある木の所へ戻ろうとした。

「君、よく猫に餌をあげにここに来るんだろう。僕は寿一。君は？」

私は返事ができなかった。どうしてこの人が、私が猫に餌をあげていることを知っているのか、また、名前を聞いてどうするのかわからず、いったいどんな人なのかもわからない。不可解なものや人ほど信じられないだろう。

結局私は、名前を告げずに走り去った。

椎の木の下に置いてあった自分の荷物のことも忘れ、途中まで来ると、猫があの男に何かされていないか、心配でたまらなくなった。自分のことだけを考えて逃げ出したことを、後悔した。

「もう一度、戻ってみよう」

木の下につくと、恐る恐る私は木の陰から覗き込んだ。猫は気持ち良さそうに昼寝をしていた。あの男の子の姿は見えない。私はほっとため息をつきながら荷物をまとめると、猫を一撫でして家に向かった。

家に着き、スケッチブックを開くと、私が今日描いたページの次のページに、何かが描いてあることに気が付いた。

それは、細かい線の塊のようで、輪郭がつかめない。鉛筆で適当に描いた線のようだ。しばらくの間、私は目を皿のようにしてそのページを見つめていた。しかし、ある瞬間、私はスケッチブックを閉じた。

「また明日」と文字が浮かび上がったように見えたからである。

次の日、朝起きると、私はスケッチブックのことが真っ先に頭に浮かんだ。

「どうしよう……。」

一日くらい、餌をあげに行かなくてもきっとあの猫は大丈夫だろう。自力で今までも生きてきたのだから、しばらく、あそこに行くのはやめておこう。でも、昨日、猫より自分の身を大切にしようとして後悔したのだから、また同じことは繰り返したくない。

とりあえず、スケッチブックを見てみることにした。もしかしたら、昨夜のあの浮かび上がった

文字は、目の錯覚だったのかもしれない。
　そう思い、スケッチブックを開くと、そこには昨日と同じ、無数の細かい線が何かを形作っていた。
　今度は一瞬で、私は何が描かれているのかがわかった。
　猫である。
　私はスケッチブックを閉じると、朝食を食べるため、階段を下りた。

　小さな頃、よく壁や天井の模様や、凹凸、挙句には、布の織り目にまで、私はいろいろな形を思い描いた。それは、たとえば人の顔だったり、動物だったりした。しかし、学年があがり、現実を理解するようになると、模様は模様、凸凹は凸凹、織り目は織り目というふうに、固定され、いろいろなものを見ることもなくなった。

　午後になると、やはりあのスケッチブックが気になり、開いてみた。やはり、あの無数の細かい線がうごめいている。そう、私には線が動いているように見えた。
　たまらなくなって、スケッチブックを持ったまま私は外に駆け出した。太陽が照り付け、目が眩んだ。それでも私は走りつづけ、あの川沿いの道を登っていった。
　猫が私の足音を聞きつけたのか、いつもの場所にたって、ニャーニャーと鳴いていた。餌を持ってこなかったことに謝りながら猫を抱くと、私は昨日、石碑があった場所に向かった。

「君って、いつも謝ってるの？」
　今度は、横から声がした。昨日の男の子だ。私は、今回は落ち着いて、返事をした。
「自分が悪いことをしたと思ったらね。あなた、私のスケッチブックに落書きしたでしょう」
「落書きじゃないよ。いろいろ楽しめただろう？」
　私は返事ができなかった。私は、あの無数の線が作り出す形が嫌いではなかったからだ。
「昨日も言ったけど、僕の名前は寿一。君は？」
「私は、香澄。あなた、こんなところで何してるの？」
　私がそういうと、彼は白い歯を見せて笑った。
「昨日は全て敬語だったのに。まあ、よろしく。別に人が何してても いいだろう。ここは気持ちがいいから、ただ日向ぼっこしたり、涼んだりしているだけだよ」
　なぜか、私は彼に対して警戒を全て解いてしまった。いろいろ悩んだ昨日一晩が馬鹿らしいとさえ思った。

　それから、私たちはお互いのことを話し合った。そして、私は彼が私より一つ年上で、都会から彼の祖母の家に泊まりに来ていることを知った。そのほかにも、趣味や、学校の話などについて話しているうちに、日が暮れ始めた。湿気はあるものの、川の近くで、また、山の陰になるため、気温が急激に落ちる。寿一が、身震いした。
「もうそろそろ帰ろう」
　彼は立ち上がりながらそう言った。

「今夜から、盆踊りだわ」
　私は、山道から出ると、聞こえてきた太鼓の音に気付いた。
「幽霊の季節か」
「幽霊って、本当にいるのかな」
「さあ」
　彼はどうでもいいようにそう相槌を打つと、道路を渡った。私も後に続く。
「今夜、またそのスケッチブックを見てみろよ」
寿一は私のスケッチブックを指差して言った。
「幽霊がみえるはずだから」
「え」
「じゃ、また明日」
　彼は、ふっと笑うと彼の家があるらしい方向に歩き出した。私は違う方向だ。

　その夜、寝る前にスケッチブックを開くと、あの線の塊は、顔のように見えた。どこかで見たことがある顔だ。誰だったろう。これが幽霊なのだろうか。
　想像していたよりも、ずっと穏やかな顔つきのような気がした。

　そして盆の二日目、私は母と、母方と父方両方の墓参りと、祖父母の家にある仏壇に線香を供えにいった。線香の煙で墓場は充満していた。その煙は、なんとなくあのスケッチブックの線のようにも見える。
　いつまでも萎れないということで、母は造花を用意してきていた。私はバケツに汲んできた水をお湯飲みに入れ、線香に火をつけた。
　墓参りがすみ、家に帰ると、私はシャワーを浴びて浴衣を着た。毎年盆の二日目だけでも盆踊りに行くのだ。夕食を終え、外に出ると、まだ日は沈んだばかりで、西側の空は白く、辺りは明るかった。
　私はあの川沿いの道のほうへ向かった。空はだんだん色を変え、鴇色をした雲がたなびき始めた。
　寿一が山道からちょうど出てきたところで私は出会った。彼は私の浴衣に驚いたようだった。
「ね、一緒に盆踊りにいこうよ」
「僕がいってもいいの？」
　彼はうれしそうに言った。
「うん。寿一の故郷の方、盆踊りないんでしょう」
「あるけど、行かないだけだよ」
　盆踊りは、私は踊れる訳でないのだが、雰囲気を味わうのが好きだった。だから、行くのは一日だけでも十分なのだ。

　二時間ほど会場をふらふらすると、私たちは帰ることにした。帰り際、寿一はにっこり笑うと、言った。
「こんなに楽しかった夏は久しぶりだ。香澄、盆踊りに誘ってくれて、ありがとう」

「うん。また明日、来る？明日で盆踊りは最後だよ」
　私がそういうと、彼はとても悲しそうな顔をした。
「悪いけど、明日、僕は帰るんだ」
「帰る？」
「そう、帰らなくちゃいけないんだ」
　まだ出会って三日目だったが、まるでずっと昔から一緒にいたような気がして、私は突然、寂しさと、悲しみが一緒になった気持ちに襲われた。盆踊り会場から、沖縄音頭の旋律と太鼓の音が風に運ばれてきた。
　しばらくの間、私も彼も口を開こうとせずに、ただ、とろとろと歩いていた。
「昔の人が、どうして星座を作ることができたのか、わかる気がしないか」
突然、寿一は口を開いた。
「香澄も上を見てごらんよ」
　寿一は、立ち止まって、夜空を見上げていた。私も夜空を見上げた。
　夜空にきらめいている無数の星は、あのスケッチブックの線のように、瞬きながら、何かの形を作ろうとしていた。
　形は作られたと思うと溶けるように星屑に混ざり、また違う形を作り出そうとする。
「うまく見えない」
　私はそう呟くと、寿一を見た。彼の横顔もまた、星屑に溶け込みそうに見えた。
「僕もだ。星座はまるっきりだめなんだ。理科でも点数がひどい分野だった」
　そういうと、彼は何かを思いついたようだった。
「香澄、猫に会いに行こう」

　私たちがいつも昼間通る山道に、街灯はない。私たちは川に落ちないように、足元に気をつけながら、山道を登っていった。さらさらと川の音が聞こえてくる。もう秋が間近だと言わんばかりに、こおろぎの鳴き声も聞こえる。
　考えてみると、ここ二日間、猫には餌を上げていなかった。またしても餌を持ってきていないことに後悔しながら、椎の木のところまで来た。
　暗闇に、二つの緑色の瞳が見えた。猫だ。
「最近餌を持ってこなくてごめんね。おいで」

いつもなら近寄ってくるはずの猫が、私がそういった途端、ふいと暗い闇の中に歩いていってしまった。
「気にしなくていいさ。彼には、会うには会ったんだから」
彼はさらりとそういうと、こっちにおいで、と私の手首を引っ張って、あの石碑がある方向に歩き出した。彼の手は、ひやりと冷たかった。
私はそのとき、彼の肌が暗闇にだんだん透き通っていくのを見た。見間違いかと思ったが、そうではなかった。ついには、私の手首に触れていたはずの彼の指の感触もわからなくなった。
空を見上げると、山の中で光源が少ないせいか、先ほど町の中で見たときより、たくさん星が見えるような気がした。
透き通る寿一は、私の中で、星屑が形を作っては消え、作っては溶け込むことを連想させた。
石碑は、闇の中で青白く輝いているように見えた。私はまた、背筋が冷たくなる気がして、これ以上近づきたくないと、私は立ち止まった。しかし、手首を掴まれているので、寿一に引っ張られる形で碑に近づいていく。
「香澄、幽霊がいるかどうか話したのを覚えている？この石碑は、特別な盆の三日間だけ、幽霊が出て来るんだ」
「特別な……？」
「そう。この碑は、ずっと人々から忘れられているんだ。寂しいんだ。一度も誰かから盆に迎えられたことがない。だから、誰かが、心から手を合わせたとき、それがその幽霊にとっては盆で、幽霊は出てこられるんだ。そうしたら、その幽霊は、やっと次の世界に旅立てるんだ」
彼は、石碑を撫でながら、そういった。
「どうして、寿一はそんなこと知ってるの？何か研究してるの？」
彼は、何もいわずに、こちらを見た。彼の瞳を見て、私は初めて彼にあったときの彼の行動を思い出した。
私がいたところを見ていたように思ったが、本当は、この碑を見つめていたのではないだろうか。
「死んでいても、感情ってあるのかな」
私はふと疑問に思った。
「あるさ。生きている人間だって、無数の人々の数だけ意志があるだろう。死んでいる人間にだって、それぞれ意志があるさ」
幽霊の話を、この暗闇の、山の中でされるのは恐ろしいはずなのに、なぜか恐ろしいとは思わなかった。それよりも、寿一が生きているのかどうかがわからなくなってきた。あの時、私はこの碑の前で手を合わせた。しかし、果たして本心から何を思ったのかは、自分にもわからない。そして、生死を問わずに意志があるというのなら、自分が今、生きているのかもわからない。何が生きている証になるのだろう。
透けてみえる寿一。
寿一から見た私も、透けているのだろうか。
「さ、帰ろう」
寿一はくるっと私の方へ振り向くと、まるで、石碑から早く離れたいかのように足早に歩き始めた。
「あ、待って」
私は、もう一度石碑と、寿一を見比べた。何もおかしなところは見つからない。目の錯覚だったのだろうか。
私は急いで寿一を追いかけた。
下駄のため、歩きにくく、下駄の歯が少し大きな石に当たってはカツン、カツンと音を立てた。
私たちは、無言で歩いた。
なぜ彼は、私をここに連れてきたのだろうか。そして、なぜ彼は私に先ほどの話をしたのだろう。

山道を降りたところで、寿一は立ち止まった。
「じゃあ、また明日」
その一言で、彼が明日帰るといったことを思い出した。どこに帰るのだろう。都会から来たという彼の話は、今では信じられなくなっていた。
「うん。じゃあね」
明日で会えなくなると思うと辛かった。私たちは、この短い期間で、とてもいい友達になっていたからだ。
しかし私たちは、それだけ言うと、それぞれの家路についた。

次の日、私が目を覚ましたのは日が高く上って

からだった。部屋の中は暑く、首筋を汗が流れている。蝉の鳴き声は、この夏最大に聞こえる。
昨日の夜、スケッチブックを見ると、やはり、顔が見えた。無数の線は、ひとつひとつが意志をもち、私にその顔を描いてくれた。今度は、前の晩よりもはっきりと輪郭を捉えることができた。
それは、寿一の顔だった。

午後を過ぎると、私は椎の木の下で、猫に餌をやりながら、寿一を待った。今回は、猫は逃げなかった。
しばらくして、彼はやってきた。思いつめた顔をしながら。
「待たせて、ごめん。今日は、何する？」
「スケッチブックを持ってきたの。あなたの絵を、描かせて」
彼は何も言わず、ふっと微笑むと、私の正面に座り、猫を撫でた。
私はスケッチブックのあの線画のページの次ページに、彼と猫とを描いた。見栄えは、悪くても良いから、自分の目で見える限りのものを、全て付け加えた。
描き終えると、私は、はじめて会ったときの事を思い出しながら、もう一度彼の絵を描きはじめた。
あの時、手を合わせたのは私だった。盆より一日早かったが、もうすぐ彼が私の目の前からいなくなってしまうのだ。私は昨夜、あのスケッチブックを見て思った。
私は、できる限り丁寧に、そして、手早く彼の似顔絵を描いた。日が照っているわりに、風が出てきて、周りの木々をざわめかせた。盆が過ぎると、日が落ちるのは早くなり、周りの木々は色を変え、あっという間に秋になる。
描き終わると、私は二枚目の方の絵を彼にあげた。
「また、会えるといいね」
私は彼に渡しながら言った。
「会えるよ。待っているよ」
彼は、微笑みながら受け取った。
「待ってるよ、ずっとね。じゃあ、僕はそろそろ行かなくちゃいけない」
彼は、私があげたスケッチを二、三回折ってポケットに入れると、私の目を見た。
私は、涙を抑えることができなかった。気心が知れた人と離れ離れになるのは、これが初めてだった。
心の中では、また会えることを信じて疑わないのに、なぜか悲しく、気が沈んでしまう。
「泣くなよ。また会えるんだ」
彼は、握手のために手を差し出した。
私は、うなずくと、彼の手をとって握った。昨夜と同じで、やはり、ひやりと冷たく、触れているのかどうか分からない。
「この三日間、どうもありがとう。本当に、楽しかった。香澄に会えて、本当に良かったよ」
「私も、楽しかった」
寿一の手を握っている私の手は、いつのまにか、空を握っていた。
「待ってるよ」
彼の姿は、なくなった。
来年も、再来年も会えない。
猫が、私を心配するように私の足に身を摺り寄せた。

学校が始まり、赤とんぼが飛び回る頃になり、私は時々しかあの場所を訪れなくなった。猫は、今では我が家の大切な一員として暮らしている。家族の反対を押し切って、家に持ち帰り、私はあの猫を寿一と名付けた。刈られていた草原は、あっという間に元に戻ってしまった。今では、私の背よりも高い枯れ草があの石碑を覆っている。
私は夜、スケッチブックを開くのを忘れなかった。あの無数の線は、今では顔ではなく、違うものを描いている。
石碑と、その周りに咲く彼岸花だった。

薬学部薬剤学講座の研究発表がポスター賞を授与される！
第22回メディシナルケミストリーシンポジウム開催報告

第２２回メディシナルケミストリーシンポジウム／第１１回日本薬学会医薬化学部会年会が昨年の１１月２７日（水）～２９日（金）の３日間、本学薬学部 薬品製造化学教室 教授　田中 圭 実行委員長のもと、グランシップにおいて開催されました。学会期間中は好天に恵まれ、薬学部 薬品製造化学、薬化学、有機合成化学の 3 教室による学会運営もスムーズに進み、冠雪の富士を仰ぎ見ながらの有意義な３日間となりました。シンポジウムには、６２０名（医薬部会会員２８０名）の参加があり、講演会場、ポスター会場ともに連日活気あふれた討論が行われました。また、会場内の交流ホールで開催された懇親会には、廣部学長をはじめ約２００名の出席を得て活発な親睦交流が行われました。本年度は産官学の広い分野にわたり国の内外から第一線でご活躍の先生方をお招きし、１５演題の招待講演がありました。いずれも高度かつ充実した内容の講演であり、創薬に携わる者にとって今後の指針となる極めて重要なトピックスがふんだんに盛り込まれたものでした。またショートプレゼンテーション付きのポスター発

表の数も８３件という過去最高の演題が幅広い領域から寄せられ盛況となりました。

この一般発表の８３演題からは創薬の進展に大きなインパクトをもち将来の発展を期待される研究として５つの演題（企業 4 件、大学 1 件の枠）がポスター賞に選ばれました。この中には大学関連枠の一件として、本学薬学部薬剤学教室と北海道大学薬学部との共同研究「シクロプロパン環によるヒスタミンの配座制御：初のH３サブタイプ特異的アゴニストの創製」も含まれ、本学の創薬領域における活発かつ高度な研究活動が反映される結果となりました。

健康をつくる食事のワンポイントアドバイス①

元気の素は朝ごはん

あなたは、今元気ですか？風邪を引いていませんか？

今朝、朝御飯を食べましたか？

朝食をとるグループと摂らないグループを比較すると摂るグループが断然成績がいいことを知っていますか？それに１０年後２０年後もきっと元気で活躍できると言われていることも？

夜１０分早く寝て、朝１０分早く起きることで、人生が変えられる可能性は充分あるのです。実行する、しないはあなたの意志次第ですが。

時間があっても冷蔵庫がからっぽではどうしようもありません。前の日に準備を忘れないこと。パンか御飯、卵かウインナ、納豆など、それに野菜又は野菜ジュース。牛乳かヨーグルトがあれば最高。

カロリーメイトも摂らないよりはいいけど、淋しいですね。牛乳や果物、ゆで卵くらい添えたいですね。

カロリーメイトには脂肪がたっぷり入っていることが案外知られていないようですね。

朝お腹が空いていることも大切なことです。それには夜遅く食べ過ぎないことは承知ですよね。

食品栄養科学部助教授　大石邦枝

モスクワ国立国際関係大学の教員と学生が来学

県立大学と学術交流協定を結んでいるモスクワ国立国際関係大学（ＭＧＩＭＯ）から平成１４年度の交換学生としてＭＧＩＭＯ国際関係学部３年のミハイル・ソコリニコフ君が、１月８日に来日した。また交換教員としてオーリガ・リホレートワ先生が１月２４日に来日された。

リホレートワ先生は３月上旬までの１ヶ月半の間、本学に滞在し研究を行う。受入教員は島田孝夫国際関係学部助教授が務め、研究テーマの専門分野に関係する国際関係学部の教員が研究に協力する。リホレートワ先生は５年前にも本学に滞在されたことあり、またロシア大使館に勤務する夫とともに東京にも数年間滞在したことがある。

また、ミハイル君は清水市三保にホームステイしながら、本学では島田孝夫国際関係学部助教授らのもとで日本語や日本文化の勉強を続けている。

自動車に詳しく日本の自動車メーカーや車種、外国の高級車種などに精通しており、また写真撮影に興味があることから、デジタルカメラで自動車や日本の風景、友達とのスナップ写真などを撮影し、ロシアの友人にメールで送信して紹介している。

研究助成の採択

◎財団法人浜松科学技術研究振興会　平成14年度科学技術研究助成金、
　研究題目「放射性亜鉛を用いた新規脳腫瘍画像診断薬剤の開発」
　薬学部医薬生命化学教室　助教授　武田厚司
◎平成１４年度　財団法人東京生化学研究会　研究助成金
　研究題目「生合成酵素を用いた非天然型新規化合物ライブラリーの構築」
　薬学部生薬学教室　講師　阿部郁朗

平成１４年度厚生労働省科学研究費採択状況

＜研究代表者＞
○増澤俊幸　薬学部助教授
　研究課題：回帰熱、レプトスピラ等の希少輸入細菌感染症の実態調査および迅速診断法の確立に関する研究
○石川　准　国際関係学部教授
　研究課題：盲ろう者の携帯電話用点字モジュールの開発に関する研究
＜分担研究員＞
○加藤善久　薬学部講師　（研究代表者　国立医薬品食品衛生研究所センター長　井上　達）
　研究課題：内分泌かく乱化学物質の生体影響に関する研究
○加治和彦　生活健康科学研究科教授（研究代表者　名古屋市立大学薬学研究科教授　奥山治美）
　研究課題：数種の食用油に含まれる微量有害因子に関する研究
○園部　尚　薬学部教授　（研究代表者　国立医薬品食品衛生研究所第一室長　青柳伸男）
　研究課題：医薬品製造工程等の変更が品質に与える影響及び品質確保のあり方
○奥原秀盛　看護学部助教授　（研究代表者　静岡県立静岡がんセンター総長　山口　建）
　研究課題：短期がん生存者を中心とした心のケア、医療相談等の在り方に関する調査研究

附属図書館だより　～図書館利用状況報告～

『サービスアップしましたが、入館者数が減少しています』

今までにもこの欄でお知らせしましたように、昨年の５月の図書館システムのバージョンアップに伴い、OPAC（蔵書目録検索システム）の横断検索化により他大学・他機関の蔵書検索を容易にし、蔵書検索端末の増設や学術情報検索端末の利用解放を実施しました。窓口でのレファレンス業務も積極対応するようにしています。また、１１月からはILLの利用申し込みもシステム化し、学内のオンライン端末からの申し込み運用等、サービス面での改善がはかられています。

しかしながら、４月から１２月までの入館者数を、昨年度の同時期と比較してみますと、１日平均で１１４人も減少しています。何故でしょうか？

図書館入館者数統計	入館者合計	１日平均
１３年度　４～１２月	１５１，１２５人	７４４人
１４年度　４～１２月	１２８，５０２人	６３０人
増減比	－１５％	－１５％

ひとつには、４月からの入館ゲートシステムの更新に伴い、利用者カードを持参しないと入館できなくなったことがあげられるかもしれませんが、４月の運用開始当時には学内利用者の方々にも利用者カードを持たずに来館し、戸惑いが見受けられましたが、現在では利用者のご理解と協力によりこの制度も定着しました。また、このシステムにより、あるいは利用者申し込みをしないで利用できていたかもしれない学外者の登録が確実になりました。次の表のとおり、登録者が１２月の段階で昨年度の５割増になっていることでもおわかりいただけると思います。

学外者登録統計	登録者数
１３年度	４４９人
１４年度（４～１２月）	７３３人
増減比	１６３％

ILLのシステム化が、入館者が減少した大きな要因になっているかもしれません。ペーパーベースの時には必ず図書館に来て申し込みをしていただいていましたが現在は研究室や学部棟のオンライン端末からの検索と申し込みが可能になり、申し込み時の図書館への来館が必要でなくなった面があります。

この入館者減少傾向は、今後の電子ジャーナルの充実や蔵書の電子化等により顕著になるかもしれません。図書館に赴かなくても雑誌や図書の閲覧が可能になるからです。

でも、図書館には宝の山が存在しています。３０万冊余の蔵書が閲覧室や書庫内の書架に整然と並んで利用を待っています。この大きな山の中から利用者のみなさんがそれぞれに宝を探り当てることが可能です。講義の空き時間に書架の前で図書の背を眺めながら散策する時間も時には必要ではないでしょうか。図書館をいろいろな形で利用されることをお勧めします。

現在、閲覧室の書架の増設による再配列作業や書庫内の図書配列の整備作業を実施して、今まで以上に快適環境の図書館を目指しています。多くの利用者の来館をお待ちしています。

日本環境変異原学会賞を受賞

食品栄養科学部　木苗　直秀教授

食品栄養科学部の木苗教授は平成１４年１１月２７日（水）～２９日（金）に日本教育会館（東京）で開催された日本環境変異原学会第３１回大会総会において、「生活環境中の変異原物質の分離同定とそれらの腫瘍発生の関連性に関する研究」で学会賞を受賞した。

この賞は毎年日本環境変異原学会より研究の独創性、高度性、普遍性、学会の進歩発展に対する貢献度等を総合的に評価して研究者１名に贈られるものである。今回、水道水、河川水、沿岸海水、水生生物、日常食品に含まれる新規変異原の検索とそれらの水生生物、ヒトを含む哺乳動物の悪性腫瘍発生との関連およびそれら化学物質のリスクアナリシスに関する研究成果が評価の対象となったものである。

全国学生俳句大会で入賞

第三十三回全国学生俳句大会、大学生の部で２８００余の作品の中から国際関係学部国際言語文化学科３年の望月あすかさんの作品が入選となり、また同学科３年の小田佳枝さんがの作品が佳作に選ばれた。入選・佳作とも１０作品程度の中での入賞である。

入賞作品

＜入選＞　**火取虫死に急ぐもの耐えるもの**　（望月あすか）

＜佳作＞　**はすの花老師の喝に目を覚ます**　（小 田 佳 枝）

本学教員からの著書寄贈

先生の著書を寄贈していただきました。(平成１４年１１月以降)

◎ 国際関係学部　国際行動学コース

- **国際関係学双書　１９　グローバルとローカル**

◎ 前山　隆　非常勤講師

- **現代日本の祖先崇拝：文化人類学からのアプローチ　　上下巻　訳書　お茶の水書房**
- **ドナ・マルガリーダ・渡辺：移民・老人福祉の五十三年　　お茶の水書房　１９９６**
- **風狂の記者：ブラジルの新聞人三浦鑿　お茶の水書房**
- **市民１３６６０号：日系女性画家による戦時強制収容所の記録　　お茶の水書房　１９８４**
- **エスニシティとブラジル日系人：文化人類学的研究　　お茶の水書房　１９９６**
- **異邦に「日本」を祀る：ブラジル日系人の宗教とエスニシティ　１９９７**
- **アジア系ラテンアメリカ人の民族性と国民統合：民族集団間の協調と相克に関する研究　　静岡大学人文学部　１９９３**

企業訪問にみる採用戦線は

学生部就職アドバイザー　北川　欽也

昨年秋から県内の有力企業を訪問し、採用戦線の動向を探ってみた。

これから就職活動をする学生のヒントになれば幸いである。

１．採用の動向は

産業社会は今まで経験したことのない変化に直面している。人事面では年功序列、終身雇用という形態が崩れ、労働移動が激しくなっている。

一つは量より質の重視である。採用数を減らし、成長を期待し「少数厳選」、「早期確保」を目指している。今一つは即戦力化である。企業は社員教育に力を入れる余裕が衰えており、その役割を大学など外部に求めている。

企業の採用意欲は旺盛であり、優秀な人材の確保に必死である。従って大学がこれまでのように、潜在力はあるが専門性や実践力に欠ける、いわば「白紙状態」のまま社会に送り出すことを、もはや社会は許さなくなっている。

２．企業の求める人材は

企業での活動を含めて社会に起こる諸問題を自分自身で発見し、解決できる人材、即ち「自主性」、「責任力」のある人材が求められている。

これを企業の採用選考基準という視点で捉えれば、次のチェックポイントが挙げられる。

①自己能力面…積極性、活発性、明朗性
② 対人能力面…コミュニケーション力、
　　対人理解力、協調性
③ 課題能力面…創造性、発想力、構想力
④ 営業感覚面…常識、社交性、専門性

３．どう戦力アップすればよいか

では、企業の求める社会性を備えた能力を涵養するにはどうしたらよいか。以下日頃の相談事例などを踏まえ、気付いた点を挙げてみたい。

①ビジネスマナーの習得

「マナーは人生のパスポート」と言われている。挨拶、表情、言葉遣い、身だしなみ等マナーの基基本は社会性への第一歩である。面接時絶大な威力を発揮し、合否の決め手となる。

②思考力、行動力の鍛錬

どんな組織で働く場合にも必要で共通的なスキルであり、「好奇心」や「チャレンジ精神」が大切だと思う。思考力では自己理解、付加価値、グループ思考などの「知識」、人間観、社会観、価値観などの「見識」が求められる。

行動力では外国語、コンピューター、計算力などの「リテラシー」や、課題設定力、計画性、集中力などの「問題解決力」が求められる。

③人間力の涵養

人生の幸せを広げるのは豊かな人間性である。若いうちにルール遵守、正直、守秘性などの「倫理観」や素直、親切、ロイヤリティなどの「誠意」を身につけてほしい。

４．グローバルにローカルに

大学生活は、色々な経験を重ね、「自分探し」をするための助走期間とも言える。自分なりに打ち込めるものを見つけ、将来をイメージし、自信をもって翔いてほしい。

大局的（グローバル）な視点で思考し、地域社会（ローカル）に根ざした行動を期待する。

就職ガイダンス（業界勉強会）

新たな全学共通科目開講の目指すもの

教務委員長　奥　直人

本学では、平成７年度の大幅な教育体制の改革以来、全学共通科目、学部基礎科目及び専門教育科目からなるカリキュラムを柱とする教育を行ってきた。学部基礎科目及び専門教育科目は有機的連携をもちつつ各学部の目標・理念に沿った教育体系として機能し、これまでに優秀な人材を世に輩出してきた。全学共通科目は、三つの主題（人間と文化、人間と社会、人間と自然）のもと、広い視野と知識を身につけさせ、総合的・自主的判断力を養成するため、全学支援体制のもとに実施されてきた。

ところで、時代の変遷とともに「新しい時代における教養教育の重要性」が叫ばれるようになり、本学においても平成13年度より教務委員会・全学共通科目運営部会において全学共通科目の見直しを始め、平成１４年２月に「全学共通科目の反省と再出発」という答申を大学経営会議に提出した。これまでの全学共通科目では、個々の教員の自主性により多くの科目を並べ、学生の興味に合わせるというニュアンスが強く、受講者が極端に少ない科目などもあり、十分に機能していなかった点が見受けられた。今回の改正では、学生にどのような教育が必要かという観点を重視し、「全学的観点より共通補完の工夫を凝らし、高度の専門職業人が備えねばならないヒューマンウェアを修得させる。そのため現実感覚を研ぎ澄ます方向で専門分野のトピックスをやさしく解説する」ことを全学共通科目の目的として、リテラシーとスタディ・スキル（第１部門）、概論（第２部門）、現代教養（第３部門）の３部門に大別した。特に第1部門にはコミュニケーション、表現、情報処理、思考法の４分野を置き、外国語の入門などを配置した。第２部門では教養教育として必要と思われる科目を、また第３部門はこれまでの全学共通科目の概念に近く、教員が専門分野のトピックスを解説するような科目をそれぞれ選抜した。

今回改正された全学共通科目は、専門分野の導入として位置づけてはいない。専門分野に進む学生は、その学部の学部基礎科目で導入を含めて勉学するように計られている。例えば第１部門の外国語の入門講義は、専門外の学生のためであり、当該外国語を専門とする学生のための講義ではない。また第２部門の生物学や物理学は、それを専門としない学部生のために開講されており、いわゆる理系の学部では、別に学部基礎科目でこれらの講義を学ぶように計られている。

学生諸君がこのような改革の方針を理解し、教養ある学士として巣立つために全学共通科目を有効に活用していただくことを望む。また「教養教育に携わる教員には、高い力量が求められる。加えて、教員は、プロとしての自覚を持ち、絶えず授業内容や教育方法の改善に努める必要がある」という中央教育審議会答申に応えるべく、教員も努力していることを十分に理解し、勉学に励んでいただきたい。君たちの将来が、大学の評価であり財産である。

研究室・ゼミ紹介

ディープにコリアを学習

国際関係学部　小針進ゼミ

私たちのゼミは３年生５名、４年生５名、大学院生２名のほか、韓国へ留学のため休学中の２名が在籍しています。ゼミの内容は社会学的思考の考察から始まり、現代韓国朝鮮の社会・文化、在日韓国･朝鮮人、日韓関係など様々な分野を３年生が中心になって発表し、それに対して院生や４年生も含めて討論する形で進められます。毎回活発な意見交換によってお互いに良い刺激になっています。

また、外部の専門家を迎えて、普段聞けないような現場の話や裏話なども聞くこともあります。ゼミ有志で静岡市内の朝鮮学校へ行ったこともあります。

韓国の学生との交流もあります。韓国の学生が本学を訪問することもありますが、年に一度「韓国遠征ゼミ」を実施し、ソウルや釜山の大学との合同演習や識者による特別講義聴講を実施しています。昨年の訪韓時は、金泳三元大統領が当ゼミ生だけを私邸に招いて日本語で特別講義をしてくれました。**（写真）**韓国社会と政治、日韓関係、南北関係、大統領としての体験談などがその内容でした。私たちの質問にも親切に応じてくれました

が、研究室で疑問に思っていたことを、こうした識者に直接ぶつけることができるのも、当ゼミならではの体験なのかもしれません。

ゼミのレジュメを必死でつくったり、真剣に討論したりと、殺伐とすることさえある、ふだんは真面目な小針ゼミです。が、時にはお酒を飲む機会もあったり、温泉旅行の計画を立てたりと、ゼミ生同士や先生との仲もよく和気あいあいとした楽しい一面も持っています！！

（報告：石上綾子、河村朋佳、前島洋実）

有効かつ安全な薬剤の開発をめざして

薬剤学教室　山田静雄

近年、バイオテクノロジーの研究が進み、夢のゲノム新薬の実現も期待される中、医薬品を投与した場合の吸収、分布、代謝、排泄という生体内動態を明らかにし、有効かつ安全な投与形態や投与方法を研究していくのが薬剤学です。また、根拠に基づいた医療（Evidence-Based Medicine: EBM）の実践が求められる中で、医薬品の剤形を研究する製剤学や、薬効（や副作用）を扱う薬理学・毒性学と相互に連携をとりながら、医薬品の適正使用のみならず新薬開発に欠くことのできない学問領域となっています。

当教室では、高齢化人口の増加に伴い重要となるＱＯＬ疾患などを対象に、副作用の少ない治療薬や投与剤形の開発、医薬品の適正使用を目指した研究に取り組んでいます。特に、尿失禁・頻尿などの排尿障害に対する経皮吸収製剤や、慢性喘息治療を目的としたペプチド性医薬品の粉末吸入剤の開発においては興味深い知見が得られています。また、癌性疼痛の緩和などに用いられるモルヒネの鎮痛作用を、その活性代謝物を含めた脳内移行性から解析し、さらに環境汚染物質の人体に及ぼす影響を甲状腺ホルモン攪乱作用から詳細に

研究しています。ＣＯＥ研究課題として、医薬品と食品の併用効果・相互作用についての研究も期待されるものです。教室員は、教員（４名）、大学院生（博士過程：３名、修士課程:７名）、４年生（７名）で、全員一丸となって日夜研究に邁進しています。教育面では、大学院薬学研究科医療薬学専攻の設置に伴い、その一端を担うことになりました。教室員は、研究の傍ら野球、サッカーやテニスなどのスポーツを楽しみ、研究室での生活を通じて、薬学の専門的知識の修得に加え豊かな人間性を高め、国際的視野で活躍できる有為な人材となるべく努力しています。

院生からのメッセージ

薬学と工学との架け橋

薬学研究科 製薬学専攻
博士課程３年　竹内　良人

化学の分野で実用的な材料開発を行うことを目的に学部・修士期を工学部で過ごし、有機化合物を用いた光機能性材料の設計に従事していました。研究を進めるうちにその化合物ががんの治療薬としても用いられていることを知り、強い興味から博士課程を本学薬学研究科に転入し、がん治療の研究に大きく研究テーマを変えることとなりました。

全く異とした分野を専攻したことに対する多くの方々からの勉励・憧憬の言葉が、工学の知見を生かし創薬に展開する自己の意識を昂揚させました。しかし現実は思いのほか厳しい部分もあり、研究着手当初は基礎となる知識が学部・修士生と比して圧倒的に欠如していたこと、研究の展開から機材・器具管理まで全てのシステムが大きく異なることに対する順応の遅れ等を日々回顧し、その度に自己への悔恨に苛まれることも多々ありました。当然のことながら実験手法もこれまでに経験したことのないもので、成就遅し技巧の習得に焦慮する毎日でもありました。現状に対峙するだけでは事の進展は困難　――　一心不乱に学術論文の精読や諸種の実験、研究者間での情報交換を行い、研究や学問に対する最大限の精進を続けるよう心掛けたことが現在の薬学での研究遂行に対する自信に繋がりました。見聞を広げるよう努めた結果、当初から思慮していた研究意識をより幅広い視点・観点から考察することができるようになりました。現在・来世に期待が寄せられる事柄を適切に察知し、後の失敗を畏怖することなく迅速に実行に移す。この繰り返しが結果的に研究のみならず自己の可能性までも進捗させることとなりました。

近年、思いのほか多くの研究者が異分野の技術提供を切望しております。独立した視野から見ると接点のないように見受けられる研究も、これらを適切に融合させることで価値の高いものづくりが可能となるためです。そして工学部で習得した有機合成・材料設計・物性評価等の技術が製薬・医療の領域でも求められ、一日も早い実用化が望

アムステルダム・フリー大学理学部、Rienk van Grondelle教授（左）と

まれていることを知ることとなりました。この興味が派生して、本学在籍中に光技術をキーワードとした理工学_医薬学_産業の連携、ベンチャー企業設立を図る学生主体の団体を主宰し、現在首都圏を中心に研究者、学生各位が意欲的に諸活動を行っております。これまでに産学連携の情報交換の場としての機能を確立し、更には光科学技術を用いた薬剤設計についてスイス連邦工科大学（チューリッヒ）でのセミナーを開講し、光合成を模倣した光機能性材料の開発を目指しフリー大学（アムステルダム）で研究員として生物物理化学の研究に邁進した時期もありました。

産学連携が盛んに騒がれる今日、個人が多大かつ幅広い知識や情報を常に収集し独自の技術として育むことが肝要で、更に諸種の分野でこのような人材を求める方々が数多く居ることを知って下さい。学生期に広範な視野で物事に望み、多くの方々と接する姿勢を常軌することが自己を八面六臂な気質にすることに繋がります。これを誠実な姿勢で臨めば賛同する方々も自ずと増え、必ずや皆様の助力となることでしょう。自分自身、工学・薬学の双方で研究を遂行した経験を生かし、これらの技術を融合させて社会、産業に貢献する「薬学と工学との架け橋」でありたい、そう思います。

最後に小生の過分な素行および我儘を黙許、助勢していただいた本学薬学部・医薬生命化学教室の教員、学生各位への謝意を表したく思います。

MGＩMO留学体験記

国際関係学研究科２年　中村映美子
山崎　菜々

日本を発つ前に私たちが手に入れることが出来た情報はただ一つ、「モスクワ国立国際関係大学（以下MGＩMOと表記）の日本語を勉強している学生が多分空港に迎えに来てくれるだろう」という事だけだった。ロシアでの衣食住や授業についての詳細は何も知らされず、この情報だけを頼りに私たちはロシアへ飛び立った。

空港に到着すると、日本語が堪能なMGＩMOの学生たちが私たちを迎えに来てくれていた。私たちは非常に心強く、そして何の不安もなく、ロシアでの新生活への期待に胸を膨らませていた。しかし、問題はこれからであった。

この留学の目的はMGＩMOでロシア語の授業を受けることだった。２年前にこのプログラムでロシアに留学した友達の話には、その授業は先生が英語で教えてくれると聞いていた。だが、実際に授業を受けてみると、先生はロシア語で授業を始めたのである。この時のショックは今思い出しても泣きたくなる程だ。ロシア語を学ぼうとしているのに、先生が何を言っているのかわからないのである。日本で覚えて来た文法や語彙はあまり役に立たず、先生が言った言葉をカタカナでノートに書き取り、後でその意味を辞書で調べる、あるいは友達に尋ねる。このようにして私たちのロシア語の学習は始まった。

ロシアの新学期は９月からだが、私たちが行ったのは１０月半ばの授業が始まって１ヶ月半経つという時期だった。その為、授業の内容もだいぶ進んでしまっていて、ロシア語初心者の私たちには難しい内容であった。そこで日本語学科の先生と学生の取り計らいで、私たち二人のために特別

クラスが設けられた。しかし、この特別クラスが始まり、授業内容が易しくなったものの、私たちにとって先生の話すロシア語を理解するのはやはり難しいものであった。質問されていても質問されていることにさえ気付かず、ただ「ダー（はい）、ダー」と繰り返すことしか出来なかった。

寮ではキッチン、バス、トイレを二人のロシア人女子学生と共同で使用していた。彼女たちとの共同生活は絶好のロシア語練習の機会であったにもかかわらず、私たちの口から出てくる言葉はいつも「プリイビエット（元気？）」、ただそれだけだった。それ以外は何とか英語でコミュニケーションを図るしかないという状況であった。

コミュニケーションがうまく図れないことに加えて、ロシアでの生活は気の滅入るようなことの連続であった。例えば、寮は１２階建てなのに、今にも落ちそうなエレベーターのボタンはなぜか１６階まであったこと、ロシア人は火も消さず煙草をあちこちに捨てること、また、知らない女性にはいきなり殴られる、などの日本ではあまりないようなことに私たちは驚いた。このようなロシアでの生活にカルチャーショックを受け、私たちの心細さは増していくこととなった。

最後の授業

このような厳しい生活の中、どうにかロシア語に慣れようと、いつでも、どんなところでもロシア語を使うように心がけた。私たちにとっては簡単な表現でも相手に通じた時の喜びはロシアで暮らしていく自信に繋がった。きっとロシア人にとっては子供と話しているような感じであっただろうが。このように過ごしているうちに耳もだいぶ慣れてきて、先生や友達が話していることが何となく分かるようになってきた。また、毎日ロシア語の授業を必死で受けて、毎晩大量の宿題をこなしてきた私たちは、なんとかロシア語で自己主張が出来るようにまで成長していたのである。やがて授業でも私たちの日常生活などについて先生方と楽しく会話出来るようになったし、ルームメイトと一緒に過ごし、ロシア語で会話する時間がどんどん増えていった。先生方もルームメイトもゆっくりとロシア語を話してくれたし、私たちもロシア語で何とか伝えようと辞書を片手に必死になった。

この留学によって多くの貴重な体験をさせて頂いた。どれも私たちにとって大変意義のあるものであり、私たちの力だけでは得ることは出来なかっただろう。これも私たちにこのチャンスを与えて下さった島田先生、西山先生、ロシアで私たちを助け支えて下さった先生方、そして友達のお陰であり、感謝してやまない。

アルバート通りにて

聖ワシリー聖堂